

神田外語大学のスペイン語教育について

著者	青砥 清一
雑誌名	言語メディア教育研究センター年報
号	2018
ページ	81-96
発行年	2019-07-16
URL	http://id.nii.ac.jp/1092/00001715/

神田外語大学のスペイン語教育について

青砥清一

(神田外語大学)

A Note on Spanish Language Education at Kanda University of International Studies

Seiichi Aoto

(Kanda University of International Studies)

1. はじめに

神田外語大学は、2017年に創立30周年を迎えた。「環太平洋地域主義」を掲げる本学では、英米語学科、中国語学科および韓国語学科（現アジア言語学科中国語専攻・韓国語専攻）とともに、スペイン語学科（現イベロアメリカ言語学科スペイン語専攻）が開学時の外国語学部を構成していた。

筆者は、1989年度入学の3期生である。卒業後は民間企業に就職し、大学院進学を経たため約10年間母校を離れていた時期があるものの、学生と教員の双方の立場から本学のスペイン語教育をみてきたので、本年度から学科主任を拝命したのを契機に、その歴史を振り返り、未来に向けて現状を省察しておきたいと考えた。

本稿では、神田外語大学におけるスペイン語教育の歴史を概観した後、現在のカリキュラムと独自に開発した教材を紹介し、授業アンケートに基づきスペイン語クラスの現状を考察し、そして今後の課題と目標について私見を述べる。

2. 小史

上述したとおり、本校ではスペイン語を専攻語として教育してきた。そのほか、他専攻（主に英米語学科・国際コミュニケーション学科）向けに第二外国語クラスも開設している（本学では「選択外国語科目」という）。

開学当初、スペイン語学科のクラス編成は、一学年に1クラス（30人以下）であった。当時のキャンパスは、広い敷地に3つの教室棟と体育館と学食棟しかなく、現在8号館「Kuis 8」まで設置されている外観をみると隔世の感を禁じ得ない。学生数が今より少なかったせい、それとも若い先生が多かったせいかわからないが、教員と学生との距離が近く、牧歌的な雰囲気があったが、これから新しい大学の歴史を作っていくという希望に満ちていた。

その後、スペイン語学科の規模は拡大し、1991年度からスペイン語学科は2クラスとなり、2017年度から4クラスに増加した。入学定員は現在84名であるが、100名程度の入学者がいるので、1クラス当たり25名前後の編成である。

創設時の教授陣は、宮城昇先生（スペイン語学）、瓜谷良平先生（スペイン語学）、本田誠二先生（スペイン文学）、山崎真次先生（メキシコ史）およびアンヘル・ブラーボ先生（哲学）である。山崎先生が1990年に他校に移られ、後任には柳沼孝一郎先生（メキシコ研究）が就任された。現在、副学長と国際コミュニケーション学科長を兼任されている。

宮城・瓜谷両教授の後任には、江藤一郎先生（名誉教授）と戸門一衛先生（名誉教授）が着任された。スペイン語史が専門の江藤先生は、2016年度に定年退職するまでスペイン語と言語学系の研究科目などを担当された。厳しい指導で学生に恐れられたが、その反面、図書を入手するときにはご自身と学生への貸出用として2冊購入するという優しさを持ち合わせていた。スペイン・EU経済論の戸門先生は、英語も堪能で、2001年に新設された国際コミュニケーション学科に転属し、学科主任を務められた。

ブラーボ先生（名誉教授）は、担当したクラスの学生一人一人と研究室で個人レッスンをを行うなど、じつに教育熱心であった。作家としても活動され、2014年度に定年退職された。2015年1月24日に催された最終講義では、多くの卒業生が教授との別れを惜しんだ。

2018年現在、専任教員は、長年学科主任を務められてきた本田誠二教授、シルビア・ゴンサレス教授（コミュニケーション論）、前田伸人准教授（ヨーロッパ史・アメリカ史）、アルセニオ・サンス准教授（スペイン語教育学・

スペイン文化論)、松井健吾専任講師(スペイン語学)および准教授の筆者(スペイン語学・スペイン法学)が務める。

2008年、多言語コミュニケーションセンター(通称MULC)が設置される。スペイン語エリアは、パティオ(中庭)をイメージした内装で、そこにラテンアメリカの装飾品が彩りを添える。同センターの最大の特長は「談話空間」であり、3名のネイティブ語学専任講師が通常の教室での講義に加え、MULCにてスペイン語会話を個別に指導する。さらにスペインやメキシコからの留学生も談話空間に協力している。学生は授業外の好きな時間に会話を練習することができ、ネイティブ教員や留学生との談話を楽しみながらスピーキング力を磨く。また、先輩学生が後輩にスペイン語を教えたり仲間同士で自習したりと、学生間の交流の場ともなっている。語学専任講師は、「談話空間」のみならず、それぞれの出身地の文化(食や祭り)を紹介するイベントや映画鑑賞会などを企画し、学生の異文化理解を促している。このような語学専任講師の尽力と熱意により、MULCは本学のスペイン語教育にとって欠かせない存在となっている。



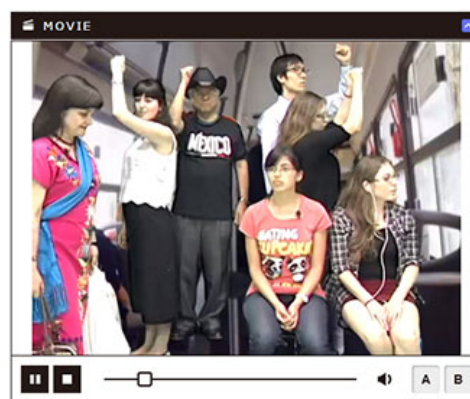
MULC スペイン語エリア
(本学ウェブサイトより転載)

2012年、スペイン語学科と国際言語文化学科ブラジル・ポルトガル語専攻が統合し、「イベロアメリカ言語学科」が誕生する。両専攻を連結する新規科目として「イベロアメリカ研究入門」「ポルトガル語特講」(ブラジル・

ポルトガル語専攻生向けには「スペイン語特講」を開講した。双方の言語と文化を学ぶ機会が増えたので、ロマンス語という、より広い視座からそれぞれの専攻語をみることができる。将来ラテンアメリカで働くことを希望するならば、両言語の習得は有利となる。

2016年、アナ・ピニャン・アルバレス語学専任講師、シルビア・ゴンサレス教授および松井健吾専任講師が東京外国語大学と共同でメキシコ・スペイン語の語彙や文法の特徴を研究し、ウェブ教材「メキシコ・スペイン語会話モジュール」を開発した。下記ウェブサイトで一般公開されている。

<http://labo.kuis.ac.jp/module/spanish/>



最後に留学について話題にする。スペイン語圏の国際提携校は2018年11月現在、スペイン・メキシコ・アルゼンチンの計12校を数える。来年度は、30名近くの学生を派遣する予定である。夏期と春期の短期研修は、スペイン・メキシコ・キューバで実施しており、毎年20名程の学生が参加する。留学を経験した多くの学生が卒業後に民間企業の海外部門、警察の国際捜査官、外務省在外公館派遣員、メキシコ政府交換留学、プロ野球通訳など、それぞれスペイン語を活かしたキャリアへと進んでいる。

3. カリキュラム

スペイン語のクラスは、開学当初は「スペイン語総合」「スペイン語会話」

「スペイン語作文」というように技能別に異なる講義名で分類していたが、現在は「スペイン語基礎」（1・2年次）、「スペイン語研究」（3・4年次）などと名称を統一している。

3.1 1年次

「スペイン語基礎Ⅰ」は1年次向けの入門・初級コースであり、総合クラス2コマ、会話クラス3コマおよび文法クラス1コマの週6コマ（前後期各6単位）で構成される。到達目標はCEFR A1レベルに設定する。

総合クラスは、文法、演習および会話を実践する。日本人2名のペア授業であり、リレー方式で展開する。直説法と命令法までを学ぶ。テキストは、柳沼教授らが中心となって開発した『プラサマヨールⅠ』（朝日出版社）を使用する。紙媒体のテキストに加え、メディア教育センターの協力の下、テキストに準拠した文法ビデオクリップを作成し、予習復習や反転授業に活用している。このビデオクリップは、学内のMoodle上で運用しており、コースに登録した学生はインターネットでいつでもどこでも視聴することができる。

会話クラスは、ネイティブ教員2名と日本人教員1名で担当する。日本人クラスはネイティブクラスを補完する役割を担い、入門者の疑問に対応する。テキストは『Español en marcha 1』（SGEL社）を使用する。

総合と会話の各クラスには専任教員のコーディネーターを配置し、全クラス共通のプログラムを展開する。講師間で密に連絡を取り合い、他の講師の授業を見学するなどして日々講義の改善に努めている。

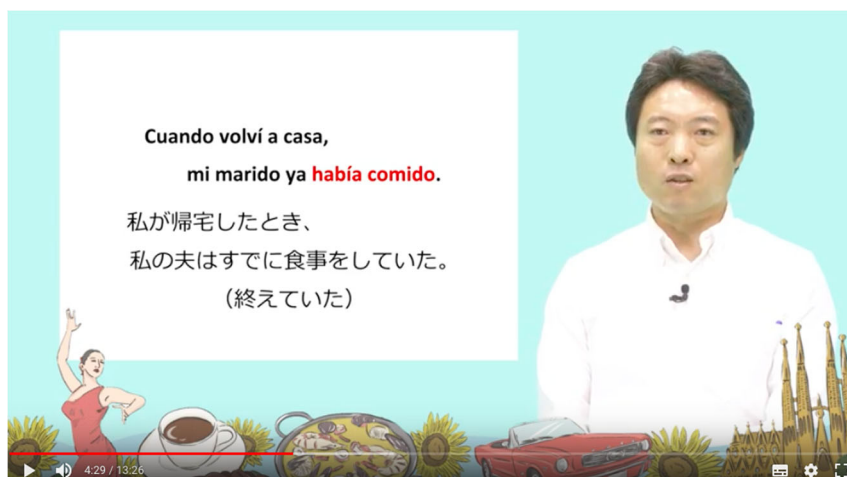
最後に、文法クラスは、日本人教員が単独で担当する。一年で接続法までの基本文法を概観するのが主な目的である。テキストは特定のものはなく、総合テキストと別のものを使用することにより、異なる視点から多角的に文法を理解させる狙いがある。

3.2 2年次

「スペイン語基礎Ⅱ」は2年次向けの中級コースである。1年次と同様に週6コマ（前後期各6単位）で、総合クラス2コマ、作文クラス2コマ、

会話クラス 1 コマ、講読クラス 1 コマである。到達目標は CEFR A2 レベルに設定する。

総合クラスは、直説法過去時制の復習から接続法までの基本文法を取り扱い、文法解説、練習問題、会話、長文読解を行う。テキストは、『プラサマヨール II』である。1 年次と同じシリーズの中級テキストで、これも柳沼教授を筆頭に本学教員が執筆に加わった。なお、本テキストについても、メディア教育センターと共同で文法ビデオクリップを開発中で、来年度からの公開を目指している（以下はデモ画面）。



作文クラスは、接続法を用いたライティングクラスで、日本人とネイティブがペアで行う。日本人が文法解説ならびに活用および作文の練習問題、ネイティブが作文と会話を指導する。このクラスでも本学教員が独自に開発したテキストを使用する。ブラーボ教授が本学で長年運用していたオリジナル教材に、文法解説・練習問題・対話文を補充したものである。2019 年に大学書林から『^{オヘラ}Ojalá』のタイトルで刊行される。

会話クラスは、MULC のネイティブ語学専任講師が担当する。テキストは、スペインの出版物を使用する。本年度は『META ELE A2』(Edelsa 社)を採用した。テキストで会話練習をするほか、ネイティブ教員がそれぞれに工夫を凝らし、プレゼンテーションや歌、語劇、ビデオ制作など様々なアクティビティを展開している。

最後に、講読クラスは日本人教員が担当する。近年は、アメリコ・カストロ著『Iberoamérica』を読んでいる。2年生にはかなり難度の高いテキストであるが、カストロの美しい文体に触れながらイペロアメリカの歴史と文化を学ぶことで、高い読解力と教養を身につけることができる。

3.3 3・4年次

「スペイン語研究 I～V」は、3・4年次向けの上級コースである。到達目標は CEFR B1-B2 レベルに設定する。

I「言語」、II「文学」、III「検定対策」、IV「ラテンアメリカ事情」、V「スペイン事情」の5コースを設置する。1コースにつき年4コマある。学生は2年間で4コースを選択し、各コースにつき最低2コマ（4単位）を修得する（卒業要件16単位を超えて修得した単位は自由選択科目に加算される）。それぞれのコースには日本人クラスとネイティブクラスがある。学生は履修要件の範囲内で自由にクラスを組み合わせることができる。日本人とネイティブのどちらか一方に履修者が偏ることはない。

「言語」は、言語学の文献を読み、スペイン語文法に関する知識を深め、言語学的視点からスペイン語を理解する能力を養う。

「文学」は、スペイン文学とラテンアメリカ文学の2クラスを開講する。文学・思想・歴史・文化に関するスペイン語テキストを精読しながら、基本文法を確認し、文化理解、比喻などの文学表現を学ぶ。

「検定対策」は、スペイン語検定3級クラスと DELE B1 クラスがある。前者は日本人、後者はネイティブが担当する。なお、西検3級は合格率が15%程度の難関試験であり、たとえ留学して DELE B2 を取得しても合格できない学生が間々いる。一次試験が西文和訳と和文西訳の筆記試験で、日本語能力も試されるので、日頃から両言語で新聞や本を読むよう指導している。また、西検4級ないし DELE A2 を取得した学生には、DELE B1 ないし B2 を先に受験するよう薦めている。

最後に「ラテンアメリカ事情」と「スペイン事情」は、原書を精読しながらスペイン語力を高め、地域の歴史・文化・社会を学ぶ。

上記「スペイン語研究」では、学問領域と地域に偏りなくスペイン語と

文化知識を学ぶ。また、選択必修科目であるため、ゼミや研究科目を履修する学生にとって時間割を組みやすいのも長所である。その一方、3年生と4年生と一緒に学ぶため、履修者間の学力差が大きくなる傾向があり、クラスのレベル設定が難しい。また、講義内容が1・2年次よりも難しく、自学時間が増えるものの、1コマが1単位から2単位に増えるため、学生の履修する授業時間数そのものは減少する。つまり、卒業までの二年間で8コマを履修すればよいので、一年12コマを課される1・2年次よりも授業時間の負担が軽くなる。日々の鍛錬が欠かせない語学には好ましくなく、せつかく2年次までに積み上げてきた基礎知識が向上しないばかりか、むしろ低下するような学生まで一部にみられる。さらに、コンテンツベースの講義となり、授業中に日常会話を練習する時間がほとんどなくなるため、2年次よりも会話力が落ちたという学生もいる。今後は、週6コマと負担の大きい1・2年次のコマ数を減らしたうえ3・4年次のコマ数を増やしてバランスをとるとともに、習熟度に応じて4技能を均等に向上させることのできるカリキュラムに再編成したいと考えている。

なお、以下の研究科目では、ネイティブ教員がスペイン語で講義を行う。

- 「スペイン文化研究」 「ラテンアメリカ文学特殊研究」
- 「スペイン美術史」 「メキシコ特殊研究」
- 「現代スペイン文学」 「スペイン語マスコミュニケーション論」
- 「スペイン語スピーチコミュニケーション論」

これらの研究科目と「スペイン語研究」を併修すれば、留学に匹敵するアカデミックなスペイン語が身につく、B2レベルにも到達可能である。

3.4 選択スペイン語

専攻外の学生が履修する選択スペイン語のコースとして、「スペイン語Ⅰ」（1年次）、「スペイン語Ⅱ」（2年次）および「スペイン語Ⅲ」（3・4年次）の講座を設置している。

「スペイン語Ⅰ」は、英米語学科・国際コミュニケーション学科の選択必修科目である。文法項目は直説法現在形の習得を目指す。履修者は例年150名程度に達し、スペイン語専攻1年生の人数を上回る。10クラス編成

で、1クラスあたり20人以下を目安に少人数制を維持する。週2コマ、日本人とネイティブのペア授業であり、文法とともにコミュニケーション能力の育成を重視している。

「スペイン語Ⅱ」は、直説法の完成を目指す。ここから選択科目になるため、履修者が一気に減少し、全体で30～40人程度になる。コマ数も週1コマに減る。3つのクラスを設置しており、日本人が2クラス、ネイティブが1クラスを担当する。

「スペイン語Ⅲ」は、接続法までの基本文法を修了する。履修者はさらに減り、例年5～10人程度に留まる。ネイティブが1クラスを担当する。

必修科目のⅠを修了した学生を選択科目のⅡとⅢに継続させるための特効薬はなかなかみつからない。二年目以降もスペイン語の勉強を続けたいと思わせるには、日々の授業の充実が欠かせないことは勿論であるが、英語だけを外国語と考えず、マルチリンガルを世界標準と捉え、複数の外国語を習得するのを当たり前と思わせるべく、学生の意識を改革することが同時に必要であろう。

4. 授業アンケートにみる本学スペイン語教育の現状

本学では、学期末に学生への授業アンケートを実施している。ここではスペイン語専攻1年生の回答に基づき、スペイン語クラスの現状を探り、今後の課題を提示したい。

本学に入学してくる学生の特徴は、文法の座学よりも会話での活動を楽しみたい傾向が強く、会話演習に積極的に取り組む学生が多いことである。そのため、会話クラスについては肯定的な意見が多数を占める。

「会話の授業が多く、とても楽しかった。」

「ネイティブの先生ということもあり、スピーキングの練習がたくさんできた。」

その一方、ネイティブクラスでは、全てスペイン語で授業が行われるた

め、学生が十分に理解しないまま授業が進行してしまうという問題がある。

「全部スペイン語だったからむずかしかった。」

「ネイティブの先生だったので授業がほぼスペイン語でわからないところも多かった。」

この理解不足を補う主旨で、週3コマからなる会話クラスの1つを日本人教員に割り当てている。同時にネイティブ教員も独自にプリントを配布して問題に対処している。

「プリントを使ってペアワークすることで、新しいフレーズや単語を覚えやすかったし、楽しく学べた。」

本学は中堅校であるため、学生間の学力差が比較的大きく、新しい単元の理解度や問題を解く速度にも相当の違いがみられる。授業中に練習問題を解かせると、つぎつぎと即答していく学生もいれば、遅々として解答の進まない学生もいる。そのため、作文など時間のかかりそうな練習問題については自学用の課題とし、次の授業で詳しく解説し、理解度を確認するとよい。

「私は問題を解くのがあまり早くないので、授業中に問題を解いて答え合わせをするより、課題としてやったものを授業で答え合わせしてくれるほうが落ち着いて解説を聞くことができる。」

文法クラスの進め方については、テキストを確実に消化することは当然であるが、学生は講師による丁寧な説明を求めている。ただ、習熟度の高い学生は、分かりきった簡単な事柄を長々と話されると退屈を感じる。そのため、テキストの範囲を超えた応用的な話題を加えるべく、プリント等によりこれを補足するのが有効である。また、学習内容に関連する文化的知識や講師の体験談などの「雑談」は、学習意欲を高める大切な一要素と

いえる。

「一つ一つ丁寧に説明してくれた。」

「単語をまとめたプリントで理解が深まった。」

「授業中に教科書以外の文を先生が私たちに作る時間を設けてくれるので、そこで、授業の内容をより深く理解できる。」

「文法の授業なので、ただひたすら説明されるだけでつまらないのかなと最初は思っていたけど、文法の説明に加えて、スペインはこうだけドラテンアメリカでは少し違う文法があるだとか、わかりにくい文法の時に例をたくさん出してくださるので、興味深い内容でわかりやすい授業だと思っています。」

「機械的な授業でなく、少しの脱線がとても楽しくその中にも言語学習との関連付けがあったりしてとても良い授業でした。」

「教科書の内容に関連する、教科書には載っていない単語や例文などの説明があったので、発展させて勉強することができた。」

「授業中にメキシコについてや体験談の話をしてくれて面白くて楽しかったです。」

ネイティブとの会話経験を重ねていくと、学生は自分の発音を改善したいと感じるようになる。そのため、カリキュラムが進んでいくと、授業でも発音や聴き取りの練習に多くの時間を割くことを求める傾向がある。

「繰り返し何度も発音練習をするのが良いと思った。」

「リスニングや会話など、様々な方法で授業を進めてくれたので、やりやすかった。」

「音読の時間や、会話の時間がたくさんあったので実践的な授業が出来てとても良かった。」

「授業のはじめに、10問程度のリスニング問題を実施していたので、“r”

と “l” の発音を聞き分ける練習ができた。」

「ディクテーションなど実際の運用をイメージした内容だった。」

発音や文法の指導では、他言語、とりわけ学習経験のある英語と比較しながら説明すると、学生の理解度が深まる。とくにラテン語起源の語彙を知ると英語学習にも役立つので、スペイン語を学ぶメリットといえる。ただ、過度の援用や上級英語の使用はかえって理解の妨げとなることがあるので注意が必要である。

「英語と比較して解説してくださり、理解がより深まった。」

「一つの事象に対して様々な具体例を用いて、時たまスペイン語以外の言語で、丁寧に教えてくれるので良く理解できます。また、アルファベットを学習した時、スペイン語に特有な y, ll の発音方法を丁寧に教えていただいて、ネイティブに近い発音で会話が出来ているので大変助かっております。」

本学には少人数制に魅力を感じて入学してくる学生が多い。その求めに応えることは、本学教員の責務であろう。少人数でもクラスによっては学生が講師に尋ねにくい雰囲気になることがあり、また、活発なクラスでも消極的でおとなしい性格の学生もいる。このようなときには教員から声をかけて質問しやすい環境をつくり、学生の理解度を確認したい。

「少人数制の授業のいいところをすごく感じる事が出来ました。質問があったら授業中でもきちんと答えてくれたことが嬉しかったです。」

「文法の説明を受けた後、練習問題を解く時間を多めに取ってくれたので、じっくり自分の力で解くことができた。また、その時巡回して様子を見てくれたので間違っていた時直接指導してもらえた。」

「理解してるかどうかこまめに確認してくれるから質問しやすい。」

小テストは、日々の学習成果と理解度を把握することができる。また、

学習の良いペースメーカーともなり得る。理想としては毎回実施したいところであるが、試験作成や採点に相当の時間と負担がかかるのも事実であり、責任担当コマ数を超え、準備に時間と労力のかかるゼミや研究科目を担当している教員にとっては尚更のことである。さりとて、学生の声を聞くと、出来る限り頻繁に実施しようという気になる。

「毎回行われた授業冒頭の小テストは大変だったけど力がついた気がした。」

「定期的に各レッスンの小テストがあり、勉強の進度にメリハリをつけることができた。」

「毎授業ごとテストのために十数個の例文を覚えるのは少し大変ですが、先生がいつも作文ができる人は強いとおっしゃる通り、例文で覚えた単語やフレーズはなかなか忘れません。また、役に立つ単語や表現もあるため MULC で話すときも役に立っています。」

教員が授業で特段留意すべき事柄は、学生が文法エラーを犯したときの教員の態度である。会話クラスでは少々のエラーには目をつぶり、学生がスペイン語を使用していくなかで自ら過ちに気づいたり、教員から気づきのヒントを与えたりする。学生が話しているときに強い口調で文法エラーを注意すると、学生が萎縮して積極的に演習に参加することができなくなる。文法クラスではエラーを明確に指摘する場面が会話クラスよりも多くなるが、誠実に解答した結果として犯した過ちに対しては、教員が怒りや不満などの感情を表に出さず、冷静な態度で対応すべきであろう。

「間違えた時の先生の態度を少し改善してほしいと思いました。」

「間違いを恐れました。」

「授業中当てられた時に急かされることや間違えた時に『なぜこの程度のことかわからないのか』と言いたげな態度が嫌だった。」

大学の教員は、話し方について訓練を受ける機会がほとんどなく、高い

意識をもって話し方を向上させようという人もあまりいない。ときに放送大学の番組で講義を視聴すると、アナウンサーのナレーションは耳に心地よく内容も頭に入ってくるが、いざ大学教員の解説が始まると、滑舌が悪かったり早口だったりして途端に聴きにくくなるため、途中で視聴を止めてしまうことがある。大学教員も人前で話すのを業としている以上、ある程度は聞き手の立場になって聴きやすい話し方を心がけるべきである。板書や授業の進行についても同様である。

「先生の説明が早口で理解しづらかった。」

「文法の説明の板書が分かりづらかったです。」

「進行具合が早かったり遅かったりしてついていけないことがあった。」

最後に、本学に入学する学生、とりわけ推薦入試で入学してくる学生のなかには、高校時代まで放課後の自学経験の乏しかった者が数多くいる。そのような学生は、時間の管理が苦手で、自ら予習・復習をする習慣が身につけていない。これを単なる「怠け」「やる気がない」などと非難して放置せず、定期的に適度な量の課題を出すことは格別、入学時のオリエンテーションや日常の授業などで時間管理の方法についてアドバイスを与えたい。大学では学生によって時間割が異なるので、アルバイトやサークルなどの課外活動を含め、個々人の事情に応じて個別的に相談に乗るとよいだろう。

「前期の授業では予習復習の時間が上手く確保できませんでした。どのようにタイムマネジメントしたら良いかなど、アドバイスをいただけたらなと思います。」

「課題の量が多く勉強量が必ず確保できた。」

以上、授業アンケートの回答から本学におけるスペイン語教育の現状と問題点を考察した。本稿では1年生のアンケート結果のみを取り扱ったが、今後は2～4年生のデータも踏まえた上で、学年別の問題点をとりまとめ、

授業の改善に活かしていきたい。

5. むすび

本稿では、神田外語大学におけるスペイン語教育の 30 年の歩みと現状について省察した。本学のスペイン語教員は、それぞれの専門知識に由来する独自のメソッドをもち、一様に教育熱心で、学生思いである。このよき伝統は未来に継承していかなければならない。その一方、これまではそれぞれのクラスが独立独歩であったので、今後は各講師の個性を尊重しつつも、常日頃から教員間で情報を交換し、学生の習熟度データを集積・分析し、そして各講座が有機的に連動するシステムを構築しなければならない。

この 30 年でグローバル化が進み、スペイン語圏への留学や海外勤務の機会も増加した。「遠い世界の外国語」というスペイン語のイメージは、もはや過去のものとなりつつある。このような状況は有力な学習動機となり得る。スペイン語教育にとって好ましいことであるが、われわれ教員にとっての本道は、実利の有無や社会環境の変化にかかわらず、いかに学生に対してスペイン語の学習自体が面白いと思わせるカリキュラムとメソッドを構築していくことである。

授業の充実と改善とは限界をみないテーマであるが、今後の目標として、自立学習支援システムを構築したい。具体的には、個人やグループでスペイン語を自習するためのウェブ教材の開発である。段階別の自習システムに基づき、学生の習熟度に応じたきめ細かい教育サービスを提供する。

もう一つの目標は、講師の経験と勘に頼ってきた教育から、客観的なデータに基づく教育への脱皮である。たとえば、学習履歴、入試区分、卒業後の進路などの情報を集積したデータベースを構築し、AI の解析結果をカリキュラムや教材の開発、学生指導のための判断材料とする。

『言葉は世界をつなぐ平和の礎』という本学の理念をイベロアメリカで体現すべく、スペイン語教育の「神田メソッド」を確立し、高度なスペイン語コミュニケーション能力と国際教養を兼ね備えた人材を育てていきたい

いと願う。